

自閉スペクトラム症と統合失調症の疫学

土屋 賢治

浜松医科大学・子どものこころの発達研究センター 特任教授

自閉スペクトラム症(以下 ASD)の有病率が上昇を続けている。一般小児におけるその推計値は、2006年に1%を超え(Bairdら, 2006), 最近では3.22%に及ぶと報告された(Saitoら, 2020)。一方で、20世紀の精神神経疾患の代表格であった統合失調症が精神科クリニックから姿を消しつつある。本発表では、ASD および統合失調症の疫学的知見の整理を以下の論点に沿って行い、ASD と統合失調症の関連性・異同に関する議論に備える。

論点 1)「ASD の有病率は本当に上昇しているのか？」異なる母集団・異なる診断手法からえられた有病率を互いに比べても、その解釈には限界が伴う。Bougeard ら(2021)は、同一の母集団・診断手法をつかって繰り返し推計を行った6つの論文の批判的検討を通じて、近年になるほど ASD の有病率が上昇していると結論した。

論点 2)「なにが ASD の有病率を上昇させたのか？」①診断の早期化, ②診断習慣の変化, ③軽症化, ④一般社会における「障がい観」Awareness の変化, ⑤表現型上の性差に対する見方の変化, の5つの要因が検証を受けている。真の増加の可能性はあるが、それを直接支持するデータはない。

論点 3)「統合失調症の有病率は低下しているか？」先行研究は、一貫した方向を示してない。西欧・北欧のデータをメタ解析した McGrath ら(2008)は、有病率が過去50年間に低下していないと結論した。

論点 4)「統合失調症の罹病率は低下しているか？」統合失調症の罹病期間が非常に長いため、有病率は、相対的に短い期間の発症状況の変化を反映しない。McGrath ら(2008)は有病率の代わりに罹病率(incidence)を用いたメタ解析を行い、罹病率が過去50年間に低下したと結論した。